

# “富士”タイムトライアル

1 年 渡 辺 秀 樹

10月23日朝、天気晴朗なる中、私はひたすらが自転車のペダルを、ヒューラー、こいでいた。「あ、このカーブをまがればもうそろそろ、2合目だろう」という期待が、裏切られる予、数回、ペダルを踏む必然性と、ひいてはサイクリング—自転車を乗り回す事—、自体の疑問を感じながら、それでも私はこいでいる。「カリカリカリ、ガッタン」ギアがまた一段落した。五合目に着くまで、再びもとのギアに戻ることはないう。しばしのお別れじや……。くだらぬ事を考えて登ってゆく。「ガタン、ガタン」、今度は路面の段差である。「あの穴ぼこには入るまい」と思う自分に反して、前輪はどんどんとその穴に入っていく、やがて、前輪をして後輪が落ちる。軽い衝撃が、手から頭へと伝わり、これも、単調な登り坂に飽きてきた私には、気晴しになっているのだ。後ろからペダルを踏む音、そしてチェーンのきしみの音が聞こえてきた。その音が極大となる瞬間、「お先に！」という声がかかった。「もう何人に抜かれたんだろう？」と思う私をよび、「もう何人を抜いたんだろう？」と、おそろく思っているに違いない彼。両者の心境の違いを考え、思わず苦笑する。しばらくすると、彼は前方のカーブにすっくまされ、見えなくなった。再び、孤独感の中、ペダルを踏むことに左った。右向きを、車が

走り抜けてゆく。その流れゆく車の窓を、のぞく事にした。ほとんどどろが、家族づれ、アベックである。運転者はともかくとして助手席、後部席の人向は、車窓の景色を楽しみながらジュース類を飲んでゐるようだ。そして私に気がつく。どんどん後へ遠ざかる私に視線をそそいでゐる。ある者は嘲笑の笑みをたええ、ある者は、私に手を振り、降はな窓から身を乗り出して、声をかけてくれた。-----バスが通り過ぎた。エンジンの回転数が一杯に上つてゐるためか、排気ガスは真黒である。その黒煙が路上を漂ふ中、私は息をとめて走り抜ける。そして大きく息をつく。-----

ふと前を見ると、標高1800mの標識が立つてゐた。ゴールが2300m余であるから、後500mを登るわけである。「まだ長いな」と思った。空腹感を覚えたので、フロントバックを調べ、パンを取り出す。口はほおぼり、クチャクチャやつてゐると、むせて吐き気がしてきた。ゲージからボトルをびっぼってくる。ここからが大変である。まずボトル本体をしっかりとおさえて、アルミのフタを回す。そしてそのフタを、フロントバックに投げ込み、続いて現われた、コルクの栓を口ではさんで、ポンと抜く。片手は常にハンドルに置いてゐるので、非常にきつかつた。よろけて、車に、警笛を鳴らされる。やうして、やっと水はあり付く事ができた。こんな時の水は、月並な事だが、どんな飲み物よりうまいと思つた。

3合目をすぎると、下代が道端に自転車を止めて、ガチャガチ

キやっていた。瞬間にして、チエンがハブとリアスプロケットの間に、くっ込んでしまった事が解った。止まって午時けしてやるうかと考える。だが、彼が私に気付かないのを「事には、どんどん通り過ぎてしまった。今でも彼には悪かったと思ってる。ギアをどっと落として、登る事にした。やけにペダルがくるくる回る。それにもすぐ馴れてくると、前方に石を見かけるようになった。彼はそれほど疲れているようにも見えないが、いかにもたるそうな後姿でペダルを回している。二人の間の距離が縮まり、そして彼を抜いた。すぐ前にも、夏合宿を共にした先輩のK氏が走っていた。彼も抜く事にした。「やけに人に会うようになったな。」と、内心ほっとして登る。後に人と自転車の気配がした。振り向くと、N氏である。目で合図をしあう。彼にくっついて、ゴールまで行く。千合目で、役員の子の先輩のN氏の声援を浴び、きつくなった坂を、それこそ必死になつて登った。道が急に平坦になり、ゴール付近のレストハウスが見えてくる。戻ることのなれどさうと思っていたトップにギアが入り、最後の力走をする。そして、最後の本当に最後の坂を、心臓が破れんばかりにして、私、—清田君—はゴールしたのである。 (おわり)